

# 日本語とタイ語の現場指示

—話し手と聞き手が横に並んで対話する場合—

コンジット サランヤー

キーワード：対照研究、指示詞、現場指示、コ・ソ・ア、nii・nan・noon・nuun

## 1. はじめに

日本語には話し手と聞き手と対象物の位置関係を指示する機能を持つ「コレ、ソレ、アレ」や「ココ、ソコ、アソコ」などがあり、タイ語にも「annii, annan, annoon, annuun」や「tiinii, tiinan, tiinoon, tiinuun」などがある。本研究では構文的な使い方は考慮せず、これらを「コソア」と「nii, nan, noon, nuun」にまとめて「指示詞」と考える<sup>1</sup>。

「コソア」と「nii, nan, noon, nuun」は、現場の事物を指示する「現場指示」と談話上の事柄を指示する「文脈指示」に大別できる<sup>2</sup>。本研究は、対照研究の立場で、実際の会話空間における日本語の「コレ、ソレ、アレ」とタイ語の「annii, annan, annoon, annuun」の現場指示用法の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。そのために、話し手と聞き手の空間上の関係を様々に設定し、それぞれの関係において日本人とタイ人の被験者に指示詞を用いて対象物を指示させるという実験を採用した。

本稿では、実験で得られた全データのうち、聞き手が話し手の横に並んでいるという設定から得られたデータを抽出し、対照的に分析、考察した結果を示す。

## 2. 実験概要

### 2.1. 実験方法<sup>3</sup>

日本語の指示詞は、話し手からの遠近感によって使い分けられる場合と、指示詞対象が話し手の勢力範囲内にあるか話し相手の勢力範囲内にあるかも考慮して使い分ける場合がある。一方、タイ語の指示詞は相手の存在をまったく考慮に入れずに話し手からの遠近感のみによって決定されると指摘されている<sup>4</sup>。

日本語教育の立場から見た場合<sup>5</sup>、このような心理的な遠近感、勢力範囲という抽象的な説明を、各指示詞の指示方法と対象物の特徴からより具体的に示すことが、日本語とタイ

1 「nii, nan, noon, nuun」の構文については Amara (2000) や Vichin (1982) などを参照。

2 日本語の指示詞の分類に関しては 迫田 (1998) を参照。

3 コンジット (2004) を参照。

4 ソムキヤット (1995) を参照。

5 ワーサナー (1995) を参照。

語の指示詞の類似点と相違点への理解を深める一つの方法になると考えられる。

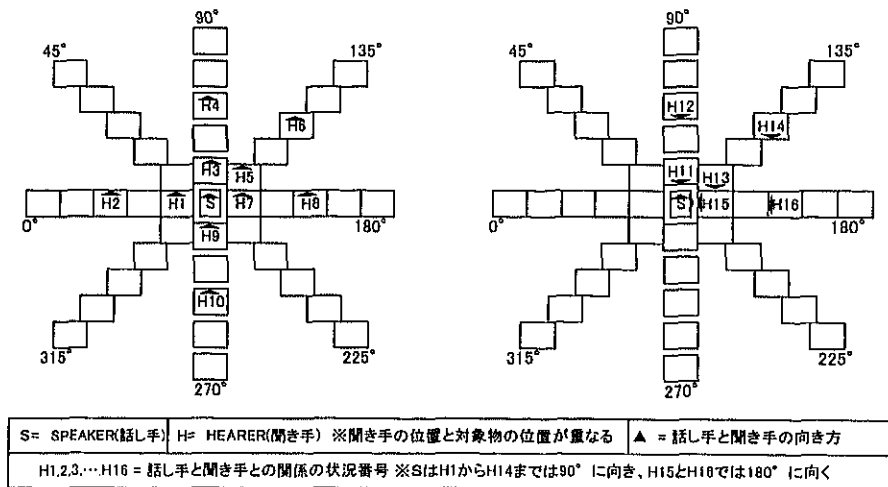
そこで、本研究では話し手と聞き手が実際に会話する空間において、物理的に存在する対象物に対して、日本人とタイ人が日本語とタイ語の各指示詞を用いてどの対象物を指示するかを観察する実験を採用する。そして、この実験で得られたデータに基づいて各指示詞が指示する対象物と話し手と聞き手との物理的な位置関係を分析し、それぞれの指示詞の対立関係を考察する。

## 2.2. 実験設定

本研究では、日本語の現場指示に関する先行研究<sup>6</sup>を参考にして、話し手と聞き手と対象物の空間上の位置関係を 16 通り設定した。以下では、これらの位置関係を「状況」と呼ぶ。被験者は話し手になり各状況の中心に座り、実験者は聞き手になり状況ごとに設定された位置 1 から 16 まで移動する。状況ごとに話し手の周囲 40 の位置に対象物を設置し、実験者は各位置から対象物の位置について番号で質問し、被験者は指示詞を用いて答える。以下では実験の設定についての詳細を示す。

### 2.2.1. 話し手と聞き手の関係

話し手（以下 S）と聞き手（以下 H）の関係を示す 16 状況は、【図 1】と【図 2】で示すとおり、S と H の体の向き、角度、距離を様々な組み合わせで設定した。なお、各状況は、S の位置を変えずに H が様々な場所に移動することによって作られる。



【図 1】「並」の話し手と聞き手の位置関係 【図 2】「対」の話し手と聞き手の位置関係

まず、体の向き（以下、SH 向き）については、「並」と「対」の二つの条件を設定した。「並」【図 1】は S と H が同じ方向を向いて会話するという条件で、「対」【図 2】は S と

6 今井 (1979)、高橋・鈴木 (1982)、遠藤 (1988)、遠藤 (1989) などを参照。

H が向かい合って会話するという条件である。

つぎに、H の角度と距離については、実験場の中心から放射状にひいた線上に設定した。この線は、実験場の中心から放射状に 45 度ずつずらして 8 本ひいたもので、中心から 1.5 メートル単位で 5 段階の距離を設定した。この線上に設定した角度と距離について、本論では、その角度を  $0^\circ$ 、 $45^\circ$ 、 $90^\circ$ 、 $135^\circ$ 、 $180^\circ$ 、 $225^\circ$ 、 $270^\circ$ 、 $315^\circ$  と呼び、距離を 1.5m、3m、4.5m、6m、7.5m と呼ぶ。これらの角度と距離のうち、H の位置は以下の条件に設定した。すなわち、角度については、「並」では、H が  $0^\circ$ 、 $90^\circ$ 、 $135^\circ$ 、 $180^\circ$ 、 $270^\circ$  にいる条件、「対」では  $90^\circ$ 、 $135^\circ$ 、 $180^\circ$  にいる条件であり、中心 S からの H の距離（以下、HS 距離）については、1.5m (H1、H3 等の H 奇数番号) と 4.5m (H2、H4 等の H 偶数番号) という条件である。これら体の向き、角度、距離という 3 つの条件の組み合わせから、「並」では 10 状況 (H1 から H10)、「対」では 6 状況 (H11 から H16)、合計 16 状況を設定した。

なお、対象物（以下 R）には 1 から 40 まで番号をふり、以上のように設定した角度と距離からなる 40 の位置にランダムな順番で設置した。各状況では、一つの R が H 位置と重なる。R の位置について以下では  $0^\circ$  1.5m や  $225^\circ$  6m のように呼ぶ。

### 2.2.2. 会話の設定

実験では著者が実験者になり、日本人 5 人とタイ人 5 人が被験者になる。実験者と被験者は一対一で 40 位置の R の位置について問答をする。日本人の被験者は「コレ、ソレ、アレ」のいずれか一つを選び、タイ人の被験者は「annii、annan、annoon、annuun」のどれか一つで R の位置を示す。

## 3. 実験結果とその分析

本稿では、上述の 16 状況のうち、聞き手が話し手の横に並んでいるという設定から得られたデータを抽出し、対照的に分析、考察した結果を示す。2.2.1 で示すとおり、同設定には H1、H2、H7、H8 の 4 つの状況がある。ページ数の都合により本稿では、SH 向きが「並」で、 $180^\circ$  の SH 距離 1.5m に H がいるという H7 を分析した結果のみを示す。

分析においては、各指示詞の使用人数と各指示詞が指示する対象物に注目する。S と H の空間上の位置関係について各対象物をもつ情報を、各対象物の特徴とみなし、これらの特徴から各指示詞の対立関係を探る。各指示詞の使用人数は各指示詞の使用条件が該当する程度を反映し、使用人数が多いほどその程度が高いと考える。

対象物(R)の特徴としては、まず、R が属する状況として、S と H の体の向き (SH 向き) と、S と H の距離 (SH 距離) に注目する。また、R の位置については、中心 S から見た角度 (R 角度)、距離 (RS 距離)、方向 (RS 前後)、H からの距離 (RH 距離)、方向 (RH 前後) に目を向ける。さらに、S からの距離と H からの距離の差 (距離の差) と、距離の差によって R と S と H の距離関係を比較した結果 (RSH 距離) に着目する。

以下の結果分析では「コ」はコレ、「ソ」はソレ、「ア」はアレ、「i」は annii、「a」は

annan、「o」はannoon、「u」はannuunを表す。各指示詞の使用人数は「0」、「1」、「2」、「3」、「4」、「5」で表す。RSH 距離に関しては、「H」はRH 距離が0mでRとHの位置が重なる場合、「S近」はRS 距離の方が短い場合、「H近」はRH 距離の方が短い場合、「SH」はRS 距離とRH 距離の差が0.5m以内であることを表す。RS 前後とRH 前後に関しては、0° から180° の範囲にあるRを「前」、225° から315° の範囲にあるRを「後」と表す。

【表1】はH7における各Rの特徴をR角度とRS距離の小さい順に並べたものである。

【表1】H7における各対象物の特徴

状況(H)	R角度(°)	RS距離(m)	RH距離(m)	距離の差(m)	RSH距離	RS前後	RH前後	R
7	0	1.5	3.00	1.50	S近	前	前	1
7	0	3	4.50	1.50	S近	前	前	5
7	0	4.5	6.00	1.50	S近	前	前	36
7	0	6	7.50	1.50	S近	前	前	13
7	0	7.5	9.00	1.50	S近	前	前	34
7	45	1.5	2.77	1.27	S近	前	前	26
7	45	3	4.20	1.20	S近	前	前	15
7	45	4.5	5.66	1.16	S近	前	前	25
7	45	6	7.14	1.14	S近	前	前	18
7	45	7.5	8.63	1.13	S近	前	前	35
7	90	1.5	2.12	0.62	S近	前	前	2
7	90	3	3.35	0.35	SH	前	前	29
7	90	4.5	4.74	0.24	SH	前	前	27
7	90	6	6.18	0.18	SH	前	前	20
7	90	7.5	7.65	0.15	SH	前	前	9
7	135	1.5	1.15	0.35	SH	前	前	12
7	135	3	2.21	0.79	H近	前	前	4
7	135	4.5	3.60	0.90	H近	前	前	21
7	135	6	5.05	0.95	H近	前	前	32
7	135	7.5	6.53	0.97	H近	前	前	31
7	180	1.5	0.00	1.50	H	前	H	23
7	180	3	1.50	1.50	H近	前	前	6
7	180	4.5	3.00	1.50	H近	前	前	22
7	180	6	4.50	1.50	H近	前	前	14
7	180	7.5	6.00	1.50	H近	前	前	39
7	225	1.5	1.15	0.35	SH	後	後	38
7	225	3	2.21	0.79	H近	後	後	40
7	225	4.5	3.60	0.90	H近	後	後	33
7	225	6	5.05	0.95	H近	後	後	19
7	225	7.5	6.53	0.97	H近	後	後	37
7	270	1.5	2.12	0.62	S近	後	後	11
7	270	3	3.35	0.35	SH	後	後	8
7	270	4.5	4.74	0.24	SH	後	後	3
7	270	6	6.18	0.18	SH	後	後	16
7	270	7.5	7.65	0.15	SH	後	後	24
7	315	1.5	2.77	1.27	S近	後	後	7
7	315	3	4.20	1.20	S近	後	後	10
7	315	4.5	5.66	1.16	S近	後	後	28
7	315	6	7.14	1.14	S近	後	後	17
7	315	7.5	8.63	1.13	S近	後	後	30

### 3.1. 日本語の現場指示

【表 2】は H7 における各対象物でのコレ、ソレ、アレの使用人数を示す。

【表 2】 H7 における各 R でのコレ、ソレ、アレの使用人数

	1.5m			3m			4.5m			6m			7.5m		
	コ	ソ	ア	コ	ソ	ア	コ	ソ	ア	コ	ソ	ア	コ	ソ	ア
0°	4	1	0	0	2	3	0	0	5	0	0	5	0	0	5
45°	5	0	0	1	3	1	0	1	4	0	0	5	0	0	5
90°	5	0	0	0	4	1	0	2	3	0	0	5	0	0	5
135°	3	2	0	1	3	1	0	3	2	0	1	4	0	0	5
180°	1	4	0	0	4	1	0	1	4	0	1	4	0	0	5
225°	3	2	0	0	4	1	0	0	5	0	0	5	0	0	5
270°	3	2	0	0	2	3	0	0	5	0	0	5	0	0	5
315°	3	2	0	0	1	4	0	0	5	0	0	5	0	0	5

#### 3.1.1. コレ

他の指示詞よりも「コ」の使用人数が多い R は、0° 1.5m、45° 1.5m、90° 1.5m、135° 1.5m、225° 1.5m、270° 1.5m、315° 1.5m の位置にある。これらは RS 距離 1.5m という共通の特徴を持つ。ところが RS 距離 1.5m では必ず「コ」の使用人数が他の指示詞の使用人数より多いというわけではない。H 位置と重なる 180° 1.5m では「コ」ではなく「ソ」が多く用いられる。

「コ」はそのほかに 180° 1.5m と 45° 3m と 135° 3m の位置にある R にも用いられる。つまり、「コ」は H 位置でも用いられる。そして、一人も「コ」を用いない R の位置は RS 距離が 4.5m 以上の場合になる。

45° 3m と 135° 3m については、S と H の前であるという共通特徴をもつが、同様に RS 距離 3m で S と H の前にある 0° 3m と 90° 3m と 180° 3m の R では「コ」が全く用いられない。つまり、これら二つの R での指示詞の使用法は、RS 距離 3m の S と H 前で他の位置にある R での指示詞の用法と異なる。このような S と H 前の 45° 3m と 135° 3m での「コ」の用法について本稿では、個人差として考察から外すのではなく、「コ」の使用条件の中で重要度が低いものだと考える。

上述の分析からは、「コ」の使用条件は RS 距離と H 位置によって決定されることが分かった。すなわち、「コ」の使用人数は RS 距離によって異なる。RS 距離 1.5m では「コ」が必ず用いられ、使用人数が 3 人以上の R の個数が他の RS 距離よりも多い。「コ」の使用人数が 3 人以上の R の個数が、RS 距離 1.5m に続いて多いのは RS 距離 3m である。RS 距離 4.5m からは「コ」の使用人数が 0 人になる。ただし、「コ」の使用人数が 3 人以上の R の個数が一番多い RS 距離 1.5m において、H 位置の R だけは「コ」の使用人数が 3 人以下になる。つまり、「コ」は RS 距離が近いほど使用可能性が高まり、RS 距離が遠くなると使用可能性が低くなるが、「コ」の使用可能性が一番高い範囲内の R でも、H 位置では「コ」の使用可能性が低くなる。また、S と H の後より S と H の前の方が、「コ」の使用可能性が高い。

### 3.1.2. ソレ

「ソ」の使用人数が他の指示詞の使用人数よりも多いRは、45° 3m、90° 3m、135° 3m、135° 4.5m、180° 1.5m、180° 3m、225° 3mである。すべてのRに共通の特徴はない。

H角度とR角度が重なる180°では他のR角度と比べて、「ソ」の使用人数が3人以上で用いられるRの個数が多い。同じ180°のRでも、RS距離とともにRH距離が遠くなると「ソ」の使用人数が減る。

RS距離1.5mでは、Hの位置と重なる180°1.5mのみで「ソ」の使用人数が多いが、他のRでは「コ」の使用人数が多い。

RS距離3mでは、45°から225°までのRの他、0°と270°と315°のRにも「ソ」が用いられる。つまり、RS距離3mでは「ソ」が必ず用いられる。「ソ」の使用人数が多いRはSとH前のものが多い。しかし、RS距離およびRH距離が同じであるSとHの前の225°とSとHの後の135°での「ソ」の使用人数を比べると、前者（SとHの前）の方が後者（SとHの後）よりも少ない。

RS距離4.5mでは、135°4.5mの他45°、90°、180°でも「ソ」が用いられる。用いられるRはすべてSとHの前にある。また、同じRH距離のRでの「ソ」の使用人数は、SとHの前のRの方がSとHの後ろのRより多い。

「ソ」はそのほかに135°6mと180°6mでも用いられる。この二つはRS距離6mの中でRH距離が一番短い。135°6mとRH距離が同じであるのは225°6mであるが、SとHの後である225°6mでは「ソ」が用いられない。

上述の分析から、「ソ」の使用は、以下のようなSとHとの関係、すなわち、R角度とRS距離という条件によって決まることがわかった。RS距離3mでは「ソ」が必ず用いられるが、RS距離3mより短いRS距離1.5mではH位置でのみ「ソ」が用いられる。使用人数が3人以上のRの個数がRS距離3mに続いて多いのは、RS距離4.5mで、その次が6mである。さらに、「ソ」が用いられるのは、SとHの前で、かつRH距離が短いという二つの条件が重なった場合に限られる。RS距離7.5mで「ソ」を用いる人は一人もいない。つまり、RS距離が近くも遠くもない中間距離では「ソ」の使用可能性が高い。また、RH距離が近いほど「ソ」の使用可能性は高い。そして、SとHの前の方が、SとHの後より「ソ」の使用可能性が高い。

### 3.1.3. アレ

「ア」の使用人数が他の指示詞の使用人数よりも多いRは、0°と270°と315°の3mから7.5mで、45°と90°と180°と225°4.5mから7.5m、135°6mと7.5mである。これらに共通の特徴はRS距離が1.5m以上という点である。他に、RS距離7.5mではすべてのR角度で用いられ、「ア」の使用人数が3人以上のRの個数が、他のRS距離と比べて多い。「ア」は他に135°4.5mと45°から180°3mまででも用いられるが、これらのRでは「ソ」の使用人数が一番多い。つまり、「ア」は、「コ」の使用可能性が高いRS

距離 1.5m 以外のすべての R 位置で用いられる。また、「ソ」の使用可能性が高い R では使用人数が少ない。このことから、「ア」は「コ」と「ソ」と反対の条件で用いられると考えられる。

上述の分析によって、「ア」は RS 距離によって決定される場合と、S と H の様々な関係によって決定される場合があることが分かった。すなわち、「ア」は RS 距離が最短の RS 距離 1.5m 以外の R で用いられ、RS 距離が最長の RS 距離 7.5m の R においては必ず用いられる。RS 距離 1.5m と 7.5m の間では、RS 距離 3m の R での使用人数が一番少ない。つまり、RS 距離が設定した距離の間接点を越えると「ア」の使用可能性が高まる。特に使用可能性が高いのは、S と H の後の R で、かつ RH 距離が中間点を越えているという二つの条件が重なった場合である。

### 3.1.4. まとめ

コレ、ソレ、アレの対立関係は、S との距離および位置関係と同時に、H との距離および位置関係を考慮して決定されることが分かった。S との距離という観点からは、次のような対立が観察された。すなわち、「コ」は RS 距離が最短の 1.5m では使用可能性が一番高く、RS 距離が長くなるにつれて使用可能性が低くなる。「コ」の使用可能性が低くなる RS 距離 3m では、「ソ」の使用可能性が高くなり、RS 距離が離れると「ソ」の使用可能性は低くなる。そして、そこでは「ア」の使用可能性が高まる。一方、H との距離という観点からは次のような対立が観察された。つまり、「ソ」は H 位置に近ければ近いほど使用可能性が高いが、「コ」は H 位置である場合には使用可能性が低くなる。「ア」も H 位置に近ければ近いほど使用可能性が低い。

## 3.2. タイ語の現場指示

【表 3】は H7 における各対象物での annii、annan、annoon、annuun の使用人数を示す。

【表 3】 H7 の annii、annan、annoon、annuun の使用人数

	1.5m				3m				4.5m				6m				7.5m			
	i	a	o	u	i	a	o	u	i	a	o	u	i	a	o	u	i	a	o	u
0°	5	0	0	0	0	4	1	0	0	2	3	0	0	1	4	0	0	1	4	0
45°	3	2	0	0	2	3	0	0	0	4	1	0	0	2	3	0	0	1	4	0
90°	5	0	0	0	1	4	0	0	0	3	2	0	0	0	4	1	0	0	5	0
135°	5	0	0	0	0	4	1	0	0	4	1	0	0	3	2	0	0	0	5	0
180°	4	1	0	0	0	3	2	0	0	3	2	0	0	0	4	1	0	1	4	0
225°	5	0	0	0	2	2	1	0	1	3	1	0	0	0	5	0	0	0	5	0
270°	5	0	0	0	0	3	2	0	0	3	2	0	0	0	5	0	0	0	5	0
315°	5	0	0	0	0	4	1	0	0	3	2	0	0	1	4	0	0	0	5	0

### 3.2.1. annii

「i」の使用人数がほかの指示詞より多い R は、すべての角度の RS 距離 1.5m である。共通の特徴は RS 距離 1.5m という点である。45° 1.5m と 180° 1.5m では使用人数が少

ない。180° 1.5m は H 位置という点で他の R と異なるが、45° 1.5m よりも「i」の使用人数が多い。よって、「i」の使用人数の違いは H 位置の影響ではないと考えられる。「i」は他に 45° 3m、90° 3m、225° 3m、225° 4.5m の R にも用いられるが、RS 距離 6m と 7.5m の R には用いられない。

「i」が用いられるが使用人数が他の指示詞より少ない R と他の R の違いについては、設定した R と S と H との関係からは説明できない。ただし、RS 距離別で使用人数を比較すると次のようなことが分かる。すなわち、「i」は RS 距離 1.5m では使用人数も使用個数もほかの RS 距離よりも多い。次に使用個数と使用人数が多いのは RS 距離 3m で、その次は RS 距離 4.5m と続く。RS 距離 6m よりも離れると一人も「i」を用いない。

つまり、「i」の使用条件は RS 距離のみによって決定される。すなわち、「i」の使用人数は RS 距離によって異なる。RS 距離 1.5m では必ず「i」が用いられ、他の指示詞より使用人数が多く、RS 距離が離れるにつれて「i」の使用人数と使用個数が減る。言い換えれば、「i」は RS 距離が短ければ短いほど使用可能性が高いことが分かった。

### 3.2.2. annan

「a」の使用人数がほかの指示詞より多い R は、225° 以外の RS 距離 3m、0° 以外の RS 距離 4.5m、135° 6m である。ただし、225° 3m と 0° 4.5m でも「a」が用いられる。135° 6m 以外にも 45° 6m、0° 6m、315° 6m でも「a」が用いられる。それに、45° 1.5m、180° 1.5m、0° 7.5m、45° 7.5m、180° 7.5m にも用いられる。つまり、すべての RS 距離で用いられる。

「a」についても「i」と同様に、225° 3m と 0° 4.5m と 135° 6m に関しては、同じ RS 距離の他の R との違いという観点から使用条件を説明できない。しかし、RS 距離の違いという観点からは説明できる。つまり、RS 距離 1.5m と 7.5m では「a」の使用人数が 2 人以下である。「a」の使用人数と使用個数が多いのは RS 距離 3m と 4.5m である。RS 距離 6m でも 3 人以上の使用人数はあるが、その個数が少ない。

つまり、「a」の使用は RS 距離の違いによる。「a」はすべての RS 距離で用いられるが RS 距離最短の 1.5m と RS 距離最遠の 7.5m の間では使用人数と使用個数が多い。RS 距離 3m と 4.5m の R よりも RS 距離 6m の R の方が「a」の使用人数が少ない。言い換えれば、「a」は RS 距離が短くも長くもない中間距離において使用可能性が高い。RS 距離が中間距離より短くなるにつれて、また、RS 距離が中間距離より長くなるにつれて「a」の使用可能性も低くなる。

### 3.2.3. annoon

「o」の使用人数がほかの指示詞より多い R は、0° 4.5m 以外の RS 距離 4.5m、135° 6m 以外の RS 距離 6m、すべての R 角度の 7.5m である。「o」は他に 45° と 90° 以外の 3m でも用いられる。RS 距離 1.5m では一人も「o」を用いない。

「o」の使用条件についても、同じ RS 距離の他の R との違いという観点ではなく、RS 距離の違いという観点から説明できる。すなわち、RS 距離 1.5m では「o」が用いられな



いが、RS 距離 3m から RS 距離 7.5m までの R で使用される。RS 距離 3m では、「o」が用いられるが、使用人数は 2 人以下である。RS 距離 4.5m になると、「o」が使用される R の個数も使用される人数も増える。RS 距離 6m になると、他の指示詞より「o」の使用人数が多い R の個数が増える。RS 距離 7.5m になると、すべての R で「o」の使用人数が他の指示詞より多い。RS 距離が離れるにつれて「o」の使用人数が増えていく。

上述の結果から、「o」の使用は RS 距離によって決定されると考えられる。「o」はすべての RS 距離で用いられるが、RS 距離最長の 7.5m では使用人数も使用個数も一番多い。RS 距離が短いほど使用人数も使用個数も減る。言い換えれば、「o」は RS 距離が短ければ短いほど使用可能性が低い。

#### 3.2.4. annuun

「u」の使用人数がほかの指示詞より多い R は一つもない。「u」は 90° 6m と 180° 6m の R でのみ、各一人の使用人数で用いられた。5 人中 2 人の被験者によって使用される「u」をタイ語の指示詞から排除することは妥当ではないと考えられる。しかし、「u」についてのデータが不十分であるため、本稿の分析では「u」の使用条件を含まず、「u」の用法についての予測を以下に記すにとどめる。

「u」は「o」の使用可能性が高い範囲内で用いられるため、「u」と「o」は同じ用法を持つと考えられる。しかし、「o」は、「i」と「a」が用いられる R でも用いられるが、「u」は「i」と「a」が用いられる R では用いられない。このように、「u」は「o」の用法の一部と重なる。ただし、このことは、「i」と「a」、あるいは「a」と「o」の場合と同様に、各指示詞の境目では用法が重なることも可能である。以上から、「u」は「o」と同じ用法を持つという結論づけるよりも、「u」は「o」より RS 距離が長い R で使用可能性が高くなると予測した方が妥当だと考えられる。

#### 3.2.5. まとめ

annii、annan、annoon の対立関係は S との距離のみによって決定されることが分かった。「i」は最短の RS 距離 1.5m で使用可能性が一番高く、RS 距離が離れるにつれて使用可能性が低くなる。「a」は中距離にあたる RS 距離 3m と 4.5m で使用可能性が一番高い。「o」は最長の RS 距離 7.5m で使用可能性が一番高い。

annii、annan、annoon の使用の対立をみると、RS 距離が最短では annii、中距離で annan、最長では annoon を用いるという関係が観察された。R 位置が H 位置や H 角度と重なっても各指示詞の使用可能性は変わらないことも観察された。すなわち、R と H との位置関係とは関係がないと考えられる。

## 4. 日本語とタイ語の現場指示の対照分析

### 4.1. 日本語とタイ語における遠近感

日本語とタイ語では、現場指示における指示詞使用の決定が RS 距離に関わるという共

通点がある。「コ」の使用可能性が高い範囲は「ソ」と比べてSに近い。「ソ」の使用可能性が高い範囲は「ア」と比べてSに近い。「ア」の使用可能性が高い範囲は「コ」と「ソ」よりSから遠い。「i」「a」「o」の使用可能性が高い範囲は、「コ」「ソ」「ア」の場合と同様にSからの距離の短長に応じて決まる。このように話し手が自らを中心とする回りの空間を「近」「中」「遠」という順番に分ける行動は、話し手の空間に対する「遠近感」を示すものである。

なお、話し手の遠近感は絶対的なものではない。すなわち、実際の会話空間では話し手から同じ距離にある対象物であっても、前にある対象物のほうが後にある対象物より近く感じる場合もあり、話し手の右の方が左より近く感じる場合もある。発話の瞬間に何らかの理由でより長い距離にある対象物を近く感じる場合もある。

こうした話し手の遠近感に着目して日本語とタイ語の現場指示を照らし合わせてみると、「i」は「コ」、「a」は「ソ」、「o」は「ア」と対応することになる。

#### 4.2. 日本語とタイ語における勢力圏

日本語の現場指示の「コ」「ソ」「ア」は、RS距離と同時にHとの位置関係も考慮に入れて決定される。すなわち、「コ」は通常に話し手に近ければ近いほど使用可能性が高いが、話し手にもっとも近い位置であっても聞き手の位置と重なると「コ」の使用可能性が低くなり、「ソ」が用いられる。また、「ソ」は聞き手の位置に近ければ近いほど使用可能性が高く、「ア」は話し手と聞き手に近ければ近いほど使用可能性が低くなる。つまり、「コ」の使用可能性は話し手との位置に関係しているが、「ソ」の使用可能性は話し手の位置ではなく聞き手の位置と関係している。そして、「ア」の使用可能性は話し手と聞き手の両方の位置に関係している。

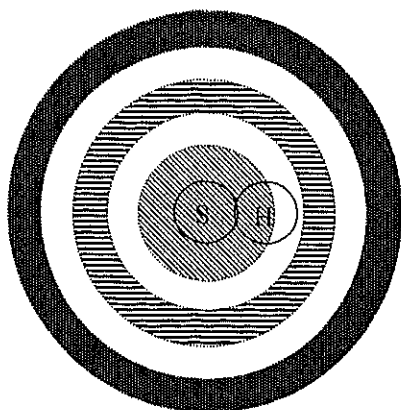
このような、話し手が自らの位置だけではなく、聞き手の位置もあわせて自分の周りの空間を「自分の周り」、「相手の周り」、「自分と相手の周り」に分ける行動は、「話し手の勢力圏」、「聞き手の勢力圏」を表すものである。

一方、タイ語ではHの位置に距離的あるいは角度的に近いRであっても「i」「a」「o」の使用可能性には影響が及ばない。「i」「a」「o」の使用可能性はRS距離によって決定されたままである。タイ語の現場指示の中で、日本語のように聞き手の位置に距離的あるいは角度的に近い対象物において特に使用可能性が高い指示詞はない。

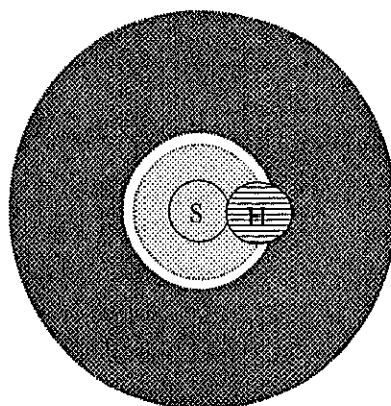
#### 4.3. 日本語とタイ語の現場指示の対立関係

以下の【図3】と【図4】は上述の分析をもとに、日本語とタイ語の現場指示用法における各指示詞の対立を示したものである<sup>7</sup>。

7 柴田（1980）や高橋（1982）や正保（1982）などの心理モデルも参考した。



【図 3】 タイ語の現場指示



【図 4】 日本語の現場指示

この【図 3】と【図 4】では、▨は「annii」、▨は「annan」、▨は「annoon」、▨は「コレ」、▨は「ソレ」、▨は「アレ」を示す。□は各指示詞の境界線を示す。

二つの図は、タイ語と日本語の話者による空間の異なる分け方を示している。すなわち、タイ語話者は、「話し手の近」、「話し手の中」、「話し手の遠」という 3 つの空間に分けるが、日本語話者は、「話し手の勢力圏」、「聞き手の勢力圏」、「話し手と聞き手の勢力圏外」という 3 つの空間に分ける。つまり、タイ語の場合では話し手が自分を中心に、回りの空間を自らの位置から近い順番に分けていく。どの指示詞の領域の中心点も話し手になる。しかし、日本語の場合は「コ」と「ア」の中心点は話し手自身であるが、「ソ」の中心点は聞き手になる。「ソ」の領域は「コ」と「ア」の領域と重なる。このことを各指示詞の使用可能性という観点から考えれば、日本語の場合には、聞き手の位置を表す「ソ」によって「コ」と「ア」の使用可能性が低くなるが、タイ語の場合では聞き手の位置は各指示詞の使用可能性に影響を及ぼさないということである。

また、境界線の幅の違いは、各指示詞が他の指示詞の使用範囲において使用される可能性を示す。すなわち、タイ語の場合で境界線の幅が広いというのは、各指示詞は他の指示詞の使用範囲において用いられることが多い。ところが、日本語の場合で境界線の幅が狭いというのは、各指示詞は他の指示詞の使用範囲で用いられる場合が少ない。

## 5. 結論

以上では、日本語話者とタイ語話者による指示詞の使用方法与聞き手の位置の関係を具体的に示した。それによって、話し手の勢力圏と聞き手の勢力圏に関する概念の理解を深め、日本語とタイ語の現場指示の類似点と相違点を明らかにした。

本稿では 16 状況設定して得たデータのうち一部を示したが、「コレ」と「annii」につ

いて対照的に分析した結果も別の論文で論じた<sup>8</sup>。次は、他の状況における指示詞用法と、「ソレ」と「annoon」などを対照的に分析した結果について、稿を改めて論じる。

#### 【参考文献】

- 池上嘉彦 (1977) 『意味論』大修館書店
- 石綿敏雄・高田誠 (1990) 『対象言語学』桜楓社
- 今井四郎 (1979) 「指示詞代名詞の指示機能について」『北海道大学人文科学論集』北海道大学文学部 pp.1-16
- 遠藤めぐみ (1988) 「指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性と聞き手の非人格化の影響」『The Japanese Journal of Psychology』Vol59、No.4 pp.199-205
- 遠藤めぐみ (1989) 「対話者の操作可能性から見た指示詞ソの使用」『日本教育心理学学会編集』37・1 pp.61-66
- 金水敏・田窪行則 (1992) 『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房
- コンジット サランヤー (2004) 「日本語とタイ語の現場指示—「コレ」と「annii」の対照的な分析—」『日本語と日本文学』39 pp.16-31
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者によるコ・ソ・アの習得—』溪水社
- 柴田武 (1980) 『講座言語 第1巻—言語の構造—』大修館書店
- ソムキャット チャウエンギジワニッシュ (1995) 『日本語・タイ語における指示詞と三人称代名詞の研究—書き言葉を中心に—』筑波大学大学院地域研究科平成7年度修士論文
- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3 国立教育研究所報告集 71 pp.1-44
- 田中望・正保勇 (1999) 『日本語教育指導参考書 8—日本語の指示詞—』国立国語研究所
- 宮野高明 (1997) 『文科系のための基礎数学』オーム社
- ワーサナー ウィーラパーヌック (1995) 『日・タイ指示詞の対照研究—「コ・ソ・ア」の誤用分析を中心に—』お茶の水女子大学大学院人文科学日本語文化専攻修士論文
- Bandhamedha, Navavan (1984) *ไวยากรณ์ไทย* (タイ語文法), Rungruansan Press.
- Dhanvarjor, Ratre (1973) *ลักษณะของคำไวยากรณ์ในภาษาไทย* (タイ語の機能語彙の性質), A thesis for the Degree of Master of Arts, Chulalongkorn University.
- Panupong, Vichin (1982) *ภาษาไทย* (タイ語), Sukhothai Thammatirat Open University
- Prasithratsint, Amara (2000) WHAT PART OF SPEECH IS NÍI 'THIS' IN THAI, In *Grammatical analysis: morphology, syntax, and semantics: studies in honor of Stanley Starosta*, ed. Videia P. De Guzmen and Byron W. Bender, 141-152. University of Hawaii Press.
- Saeed, John I. (2003) *Semantic*, Oxford: Blackwell Publishers.

---

<sup>8</sup> コンジット (2004) を参照。